

見から HELLP 症候群に伴う脳血管性浮腫が主病態と考えられ、緊急血漿交換療法を施行したところ著明に意識状態が回復、その約 36 時間後にはほぼ清明となった。その後経過は良好で画像上病変はほぼ消失、入院から 2 週間後に神経所見なく自宅退院された。

HELLP 症候群は妊娠後期から産褥期に溶血・肝酵素値上昇・血小板減少を来す症候群であり、しばしば予後不良である。本症例は重篤な意識障害と著明な脳浮腫を呈したが、MRI により早期に脳梗塞や深部静脈血栓症と鑑別され、血漿交換療法で治癒が得られた。

63 後下小脳動脈狭窄に帯状疱疹を合併した 1 例

村上 博淳・外山 孚・関原 芳夫
富川 勝

長岡赤十字病院脳神経外科

これまで、Herpes zoster に引き続き脳梗塞を起こした症例は報告が散見される。今回我々は後下小脳動脈領域の脳梗塞で発症し、その後 Herpes zoster による皮疹が明らかとなった 1 例を経験したので報告する。症例は 57 歳女性。高血圧で内服治療中。境界型糖尿病を指摘されたことがあるが食事療法のみであり入院時検査では正常範囲内。突然の激しい後頭部痛で発症、嘔吐あり。初診時、神経学的異常所見なし。椎骨動脈解離を疑ったが、頭部 CT 上出血なし、脳脊髄液も水様透明であった。同日夕方になり左顔面の痺れが出現、嚥下困難、嘔声、軽度体幹失調も認めため脳 MRI を施行したところ、左後下小脳動脈領域脳梗塞の所見であり、脳血管撮影上、同血管分岐直後に狭窄を認めたが、明らかな動脈解離の所見は認めなかった。血栓溶解剤による治療を継続していたところ、第 5 病日に同側三叉神経第 1 枝領域に herpes zoster による皮疹が出現、アシクロビルで治療して症状改善した。本症例では明らかに Herpes zoster が先行したわけではないが、同側の後下小脳動脈に狭窄を認めており、その関連性が示唆された。

64 群発頭痛様発作で発症し多発性脳神経麻痺を合併した肥厚性硬膜炎の 1 例

白崎 直樹・能崎 純一・坂井 健次*
濱口 毅*

公立加賀中央病院脳神経外科
金沢大学大学院脳老化・神経病態学
(神経内科)*

症例は 38 歳男性、平成 15 年 9 月中頃より左眼の奥とこめかみに間欠的に強い痛みが出現。10/6 当科外来受初診、FLAIR にて異常なく NSAID で様子を見ていた。10/7 夜時間外外来にて群発頭痛としてイミグラン皮下注射を行ったところ頭痛は劇的に消失した。精査のため翌日入院とした。入院時外眼筋麻痺や視力障害認めず、左眼奥痛と左こめかみ痛が強く、流涙、鼻汁を伴い、群発頭痛を呈していた。発熱や頸部硬直はず、血液検査の炎症反応は陰性で、髄液所見にて単球優位の増加 (36/3) を認めた。入院後、10/10 より左三叉神経の 2 枝と 3 枝の感覚低下が出現し、10/12 頃から咽頭左側の感覚麻痺 (左舌咽神経障害)、10/13 より左顔面神経麻痺の出現など、下位脳神経症状の出現ならびに増悪を認めた。入院時の MR では、左海綿静脈洞外側の肥厚が見られ、T1WI にて等信号、T2WI にて等信号、ガドリニウムにてやや不均一にエンハンスされる病変を認めた。10/16 の MR では病変は小脳テントや中頭蓋窩硬膜、後頭蓋窩硬膜に広がっていて、肥厚性硬膜炎を疑い 10/16 からステロイドの内服治療を開始したところ、頭痛は消失し、10/25 には顔面神経麻痺、咽頭の感覚障害の順で改善し、遅れて出現した症状から順番に回復が見られた。10/23 の MR 上でもエンハンスはやや軽快が見られたが、精査目的で金沢大学神経内科に転院し精査を行った。